

## アジスキタカヒコネと建国神(2)

—原ヤマトタケル伝承と四・五世紀史序説—

大内 建彦

## 2 (承前)

以上のごとく、記紀の伝承中、スサノヲを主人公とするあのヤマタノヲロチ神話と、ヤマトタケルの征討武勇伝説とが、ともに典型的な英雄建国神話のヴァリアントの二つであるとの結論がえられた。すなわち、この二つの説話は、それぞれの属する歴史的背景という側面からみれば、かなりの時間的文化的差異が明瞭に認められるもの、それぞれ、(1)英雄、(2)神劍(クサナギノ劍として共通する)、(3)怪物あるいは、服従しない敵ないしは荒ぶる神々、(4)聖女とあるいは、豪族の女との結婚、(5)始祖王ないしは司祭王あるいは、軍事的専制王、という五つの類型的な主要素を具備した類話であることが確認できた。そしてその際、神話類型の中でもとりわけ、普遍的パターンとして、

突出した多さを誇るこの英雄建国神話が、ことなる時代や文化の中で、さまざまにくり返し再生産・再創出されつづけてきたプロセスについても、一般化して言及しておいた。

そうした観点から、この二つの説話の再創出リイシューの最終的意図について改めて触れておけば、スサノヲのヲロチ退治の神話は、稲と鉄を文明の二大要素とする社会の中で構想され、より初源的な国家の興りと国家的祭祀のはじまりを説く神話として再解釈され、葦原中国神話の冒頭に配されたものと認められる。その際スサノヲは、天上世界で示した彼の粗暴な性格とはうって変わって、のちのち葦原中国としてイメージアップされてゆくことになるこの地上世界の初源的英雄として据え直され、彼はネイティブな混沌とした自然そのままのこの地上を、文化的世界へと決定的に変容させるべく任を負った、記紀体系神話内のパイオニア的王ともいえるべき存在へと転生させられる。こうした構

想下で、このスサノヲを中核とする神話群は、アマテラスを中核とする神話群に対して天孫降臨以降、それに同化包摂されてゆくカウンター・パートをなしつつ、スサノヲ自身は、その一大支脈の根源に位置する神として、虚構的に配されたものであることが容易に知れる。古くに位置づけられたものが逆にその新しさを露呈していることはい例証ともいえようが、このアマテラス、スサノヲの姉弟ペアー・セツト自体も、その高度な体系化論理のゆえに、史的構想の最終的プランに基づくものであることが容易に見てとれよう(1)。

もう一方のヤマトタケルはといえば、古事記中巻に様々に集成されて布置する伝説のうち、とりわけ国家形成史の実質上の要を担う唯一傑出した英雄として造型されている。すなわち、古事記中巻で述べられる物語のあらましは、神武の東遷と大和の平定による王権の歴史的起源を説くことにはじまって、崇神・垂仁の神祇祭祀の整備と畿内の綏撫という国家経営の進捗を経、英雄ヤマトタケルによる一気呵成の武力制覇と辺境経略を梃子に、飛躍的な統一国家支配の画期をわがものとし、その余勢をかって、神功・応神の半島への進出と朝鮮からの雄族の帰化を説いて終る、整然とした構成になっている(2)。この多分に伝説的手法によりかかった体系的な史的構想の中にあつて、軍事的専制王としてのこのヤマトタケルは、国家形成の物語の一大ページエントの主役を演じつつ、同時に彼はその物語の悲劇を生きることで、近代的な英雄でありつつも、あくまでも過渡的な為政者にすぎない王として相対化され、一連の物語史の中に巧妙に位置づけられているこ

とが容易にみてとれよう。

そして、この類同の英雄建国神話二つが遠く隔たりあいながら、相互呼応して密接な関わりを有して布置することの機縁が、王権のレガリアとしての三種の宝器の一翼をになうクサナギノ剣をめぐる、深長な処方由来するものであることは改めていうまでもないであろう。記紀編纂者は王権の起源をシンボライズする神剣クサナギを、皇祖神アマテラスに本源的に帰属させるべく企図にそつて、スサノヲを主人公とする英雄建国神話の一部を改変しつつ、葦原中国神話の劈頭への組み込みを敢行した。これを契機に、スサノヲの持ち物であった神剣は彼の手からはなれて、ヲロチの体内へと隠匿されることとなった。三種の神器の一角をなし、うちでも王権のシンボルの最重要位を占めるとおぼしいクサナギノ剣は、誰からも秘匿された未使用の霊剣でなければならず、それをはじめて発見し、アマテラスの手中に斉らしうる主役はといえば、アマテラスの弟たる英雄神スサノヲを措いて他にはありえない(3)。聖なる高天原からこの地上世界に降りたつたスサノヲの神格が、そこでアンビバレントなまでに一変することの理由は、このあたりにあるのであり、このスサノヲによるヲロチ退治神話は、建国神話としての本意を稀薄化しつつ、神剣クサナギの出現をとく神話へと、微妙にその主意をずらされる中で形成されていることが明らかである。

そして、上でも少しふれたように、スサノヲによる神剣クサナギの発見とアマテラスへの献上、という筋立てが、はるか時間をへだてて後

の、ヤマトヒメがそれをヤマトタケルに下賜するといふそれと、相呼応するパラレルな関係にあることはいうまでもない。この歴史層文化層のことなる二つの説話が相互にその親縁関係にあることがこの点からもうかがい知れるが、それら二つの話を一ふりの神剣で結びつなぎあわせることによって、国家的権力の象徴たる聖なる剣のよって来たる由縁を廻行的に語りつつ、その逆に、神話の時代から今にいたるまで、その象徴たる神剣によって、この王域が歴史的に切り拓かれてきたのだと説きかけてもいる。そしてその王畿を拡大し普遍化してきたその王<sup>11</sup>天皇こそが、その神剣クサナギとともに今あること、その正当(統)性を、相互に補完しあい循環する神話的物語の構造を通して、ここに説きあかされているのだ。こうした物語の展開の類型的反復のうち、巧みに埋めこまれたイデオロギー性をこそ読みとるべきなのだといえる。なぜなら、それこそが記紀を貫徹する歴史的構想の論理にほかならぬからである。

### 3 建国神としてのアジスキタカヒコネの神話

ところで、前節末部において、こうした復元的視座に基づき、時間的観点を加味して、この種の英雄建国神話が、わが国においてはより本源的には、アジスキタカヒコネをその主人公として伝承されてきたものであつたらうと示唆しておいた。その詳しい検証はさておき(なお後に詳述)、とりあえず、このアジスキタカヒコネをヒーローとする英雄建国神話が、ササノヲとヤマトタケルを主人公とする二つの英

雄建国神話へと転成してゆくプロセスについて、結論的に略述しておきたい。ササノヲによるヲロチ退治型の英雄神話は、記紀編纂時に近い新しい段階において、より本源的な建国神アジスキタカヒコネを主人公とする英雄建国神話をモデルに、その主人公をすり換え、彼の持ち物としての神剣をストーリー上から消去し、それをヲロチの体内に隠匿するという筋立てのもとに再生産された。それは裏をかえせば、英雄アジスキタカヒコネと緊密に結びついている彼の持ち物としての神剣、すなわち原クサナギノ劍が、アマテラスに先験的に帰属する劍として聖化されるに至って、アジスキタカヒコネと彼の劍とは無縁のものとして切り離され、加えて、彼自身も又、ササノヲにすげ換えられるに及びその結果、英雄建国神アジスキタカヒコネも、彼をヒーローとする建国神話も、文字どおり換骨奪胎されて解体再編されたのだといえる。

ところで、もう一方のヤマトタケル伝説中の英雄ヤマトタケルの像が、五世紀後半の倭王武烈雄略天皇代の大王子ないしは王子をモデルとしたものであるらしいことは、すでに上述したように、ほぼ定説化したかの感さえある。しかし、現行テキストにみえる、伝説中の一大巨編ともいべきヤマトタケル伝説は、容易に想像がつくように、一挙に短時日にできあがったものでは無論ない。この種の英雄建国伝説はどの時代どの国においても普遍的に自生しうるものであるにしても、恐らく、先行する一人の傑出した英雄的建国神アジスキタカヒコネを主人公とし、彼と不可分の神剣を最重要要素とする、建国神話類型を

一つの範型として、まず素朴なかたちをとって原ヤマトタケル伝説でも呼ぶべきものが形成された。そして、しだいに構想も広がりをもせ、様々にエピソードや歌謡を挿しはさみ、いく多の増補や改変を重ね、推敲がくり返し加えられる中で、長大なヤマトタケルの英雄建国伝説が構築された。そうした物語が増殖してゆく成長のあとは、この物語の主人公の名称がヲウスからヤマトラグナへ、更にヤマトタケルへと変化してゆくことの中にも端的に示されていよう。従って、基本的に、この原ヤマトタケル伝承が、大和の王権の伸展ぶりを英雄建国神話の枠組みをモデルに、主観的な粗描をつみ重ねたところに達成されたとみる立場からいえば、これとは逆に、この英雄を雄略<sup>II</sup>倭王武を模したものとし、一人の史上モデルに実体化してみせるような、還元的視座のかかえこむ限界性もおのずから明らかであろう。

そうしたモデル論以前の事実として、『宋書倭国伝』所載の倭王武の上表文中にみえる、東奔西走する大王の事蹟の記述の中に、すでに明瞭なかたちで建国的英雄像が示されていることを指摘することもできる。脱氏族的、脱地域的な認識の下で、素朴な歴史的認識も生まれ、より広域の王土の中で承けつがれてゆく王の身近かな血脈が語られる。はじめ、そうした史的地平の中で一人の建国的英雄像も造型される。英雄ヤマトタケル以前にアジスキタカヒコネなるブレ・タイプのの神格と、彼を主人公とする神話が存在した可能性を示唆する所以である。そして更に、この完成の域に達した原ヤマトタケル伝承が、五世紀後半以降、おそらく六世紀中頃以降、異系の王統下で相対化貶下をうける中

で、最終的に今日みうる現行ヤマトタケル伝説が造型された。これが、五世紀前半以前に遡りうるアジスキタカヒコネ神話の成立にはじまって、そこから現行ヤマトタケル伝説が形成されるに至るまでの史的展開のあらましである（なお後述）。

さて、このようにアジスキタカヒコネをスサノヲ神話やヤマトタケル伝説の古層に横たわる本源的ヒーロー、本源的建国神と読み換え、そうした復元的視座にたち返って、改めてこれらの神話を統廃合し、その原像の地平にむけて見据え直してみる時、様々なことが新たに了解されてくるように思える。例えば、このアジスキタカヒコネなる神名のうちの「スキ」をめぐって、それを地名ととるか、文字どおり鉄器としての鉏ととるか、二分する語源説にも一応の結着がつく。いうまでもなく、「スキ」は文字どおり鉄器の象徴としての鉏であって、そのシンボルを通路として、重要要素を構成する聖なる鉄剣とも稲作農耕とも、無理なく自然に結びつくのであって、この建国神としてのアジスキタカヒコネが「鉏」を体することをもって、彼は文化的な文字どおりの開拓カキヤク王としての側面をも具備した、近代的な英雄王たることを身をもって宣揚しているのだ。

そうした意味あいからいえば、アジスキタカヒコネは、より本源的には、記紀にあらわれるある種の英雄的な「大国<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>」像と重なりあう側面をもつかみえるものの、それぞれ二つの神格の名義の指示するところは全くちがっている。前者が具体的なるものを象徴化したものであるのに対して、後者は抽象的総合的なるものの象徴化であって、

まさに正反対の性能を示している。つまり、アジスキタカヒコネなる神格は、こうしたオホクニヌシ、オホナムチ、オホモノヌシのような抽象的な国家の守護神的神格ではさらさらなく、ましてやアマテラス的な至高神でもなく、その成立基盤をまったくことにする異質な神格であることを明らかに説示している。思うに、アジスキタカヒコネなる神は、それらの高度に抽象化された神々とはちがって、より古層に属する、鉄文化・稲作文化を背景にして成立した、具象化されたパイオニア的英雄神だったのだ、との推論を可能にする。このアジスキタカヒコネノ神こそ、ヤマトタケル像形成以前の、おそらく五世紀末頃までにその成立期を限定しうる、英雄的建国神であって、英雄建国神話のエピソードを併せもち、アジスキタカヒコネの名をもって広く流布し、厚く崇拜の対象とされてきた神であつたにちがいない。

くり返しまとめて記せば、アジスキタカヒコネノ神こそは、弥生期以降、大和という、より広汎な国家ないしは社会の中にあつて、稲と鉄をその社会や文明を特徴づける二大象徴とみだてて、それをまさに体現する聖なる英雄として、いわば鑄型にはめて作り出された具象神なのである。宗教民俗学者堀一郎の「人神型」信仰の規定に倣つていえば、このアジスキタカヒコネノ神は、おそらく四・五世紀代、列島内をまき込んだ大和王権の統一の機運と軌を一にして、従来の民族的・地域的な鬼神（チカガミ）、崇り神的なものを超克して、わが国にはじめて出現した本格的な、超自然的、超氏族的、超地域的な人文的英雄神なのである<sup>(4)</sup>。聖なる権力の象徴たる神剣によつて、怪物という自然を打倒

し、稲作という文化を新たに樹立させ、自然を克服することで国家という文化の創始を勝ちえたのだと説く神話を、一人の英雄神に託すことによつて、ここにまさに「現人神」とも称すべき神格がつくり出される。この種の英雄的建国神は、すべて男神であり、明瞭な個性的、機能神的神格をもち、その靈威の普遍性を通して、より統括的より横断的な高次の統一の信仰対象へと昇華する中で、この神にまつわる広域信仰圏も形成されてゆくのである。

たとえば、雄略朝のよく知られたエピソードとして、葛城山中に遊獵に出かけた雄略の前に、「一言(事)主神」なるヒトガミがあらわれたという話をのせる。この神は半ば可視化されてたち現れ、雄略と瓜二つで、雄略に比してもより貴顕なる存在であつたとし、雄略は「現し大靈（み）」なる「大神」として崇めまつたとされている。この話をみても、五世紀末までには、生身の王とは別のより崇高な英雄神なる神観念が成立していたらしいことが、おぼろげながら窺い知れる。そして、この神は現世の王者に似た人の姿形をとり、しかも現世の王者よりもより優位にたつて、現世に君臨するという構図をとつている。こうした神像は、まさに英雄的建国神アジスキタカヒコネにこそふさわしいものであるが、ただその神が先の話の中では一言(事)主神という一種の託宣神とも思しき神格を通して語られており、アジスキタカヒコネ的神格とは大きなへだたりを有するという難点も存している。とはいえ、この一言主神の出現する地がアジスキタカヒコネノ神の原郷と同じく葛城のこととされ(事実、この地にはこの二神を祭る古社

がある(5)、この神とアジスキタカヒコネを混同する伝承(土佐国風土記逸文)もあり、この二神の緊密な関係については十分な配慮が払われてしかるべきかと考える。加えて、稿者が英雄的建国神とみるこのアジスキタカヒコネと、いわゆる託宣神一般とされる一言主神との関係は、大国主神と事代主神のそれと全くの平行であり、こうした二神の神格の神話上の関係性そのものについてもより深い考察が必要である。しかも、このアジスキタカヒコネと大国主と事代主三神とが神統譜上相互にきわめて近接するという事実もあり、ここには説明すべき重要な課題が数多く隠されている(なお後述)。

さて、こうした経緯の中、おそらくとも五世紀後半までには成立していたと思われるアジスキタカヒコネノ神とその神話も、その一方が、ヤマトタケルに英雄を見出す伝説へと転生し、もう一方は、記紀のテクスト構想にそって、スサノヲ神話へと変容させられてゆく。そして、ヤマトタケル伝説も、記紀のテクスト構想の中にとり込まれるに及んで、ヤマトタケル自身は悲劇的英雄に位置づけられ、彼の名を冠した皇子一代の物語として新たな完成をみるようになった。こうした経過の中で、孤立した系譜の中に宙づりにされ、零落をよぎなくされたアジスキタカヒコネは、その原像の一端をわずかに、記紀内の遊離した奇妙な挿話や風土記、祝詞などのあちこちの断片化した記事の中にとどめるにすぎない。ただ、余りにも簡素にすぎない記事ながら、このアジスキタカヒコネがかつて、「迦毛大御神」と尊称されたと注記し、往時、「天照大御神」にも匹敵する格別な扱いをうけていたらしい痕

跡をとどめることについては、大いに注目されてよい。しかし、この「大御神」なる表記にしても、至高神アマテラスの尊称として付されているように、決して古さの認められる敬称とも思えない。とすれば、いささか逆説めいたいい方になるが、記紀編纂時にごく近い時期においても、このアジスキタカヒコネノ神が、葛城の地を故地として、国家的レベルの祭祀対象として手厚く尊崇され伝承されてきたその前史の根づよい力が、敢て無視し去ることを許さず、ここに注記をとどめることで、その名残りのよすがとしているのだと今は了解しておく。

#### 4 建国神の発生

さて、これまでアジスキタカヒコネノ神をそれと措定してきた、建国神および建国神話の発生をめぐる本論に入る前に、より明確にしておかねばならぬ急務の下作業が二つばかりある。その一つは、このアジスキ神話と、スサノヲのヲロチ退治譚との密接な関係の解明が、更に緻密に具体的な分析検証を通じてなされておくべきことである。もう一つは、記紀内にその実体を明記することなく、ただ一箇所「建邦神」とのみ表示されるこの建国神を具体的に措定するにあたって、いつ、どこで、いかなる理由によって、建国神なるものが創出されるのかという、建国神発生のメカニズムとその史的プロセスを明らかにしておくべきことである。前者については、稿者がかつて、「神話再生産の現場の論理」なる視座を導入し、スサノヲの発見する一ふりの神

劍の名称の変遷過程を跡づけることで、このヲロチ退治譚をアジスキタカヒコネのそれへと復元的再構成を試みたことがある(6)。ごく限られた僅少の断片的な記事をつきあわせての分析で、あやうい点もないではないが、論証の方向性そのものは肯綮にあたってはとも思っている。この点については次節で改めて詳述するとして、その前に後者のほうの、建国神なるものの概念の起源とその成立に関する方から一考を加えておきたい。この建国神の登場する、その前後のいきさつを語るくだりを改めて紹介しておこう。

欽明紀十六(五五五年)二月条の伝えるところによれば、この前年の五五四、百済の聖明王が対新羅戦に敗れ、斬殺されたとの報を天皇とともに伝え聞いた蘇我臣(稲目か?)が、その報告にやってきた亡き王の王子、恵に、今後どう対応すべきか、その点に関して次のような内容の助言を与える中に出てくる。すなわち、雄略天皇の時代に百済が高句麗に侵略され危殆に瀕した時、天皇がその救援のためにわが国の「建邦神」を遣し、その神の加護の結果、国家の安寧をうる事ができた。しかるに今はその祭祀もやめてしまっている。ついてはもう一度帰って神宮を修理し、その神を丁重にまつれば国家は栄えるだろうと、再度その「建邦神」を百済に勧請させたというものである。

さて、その記事の中で、この「建邦神」は、「原夫建邦神者、天地割判之代、草木言語之時、自天降来、造立国家之神也」と説明されている。岩波古典大系『日本書紀 下』はこの「建邦神」を、「日本の建国神で、のちに天之御中主神や国常立尊以下の人格神観念

が形成される以前のかなり漠然とした創世神の観念とみるべきであろうか」と注し、この神を、百済の建国神とみなし、「今按此專指素戔嗚尊也。事見神代紀。兼方以為大己貴命、恐不是」とする谷川士清『通証』のササノヲ比定説を排している。六世紀中頃の欽明期の記事中で、五世紀第IV四半期頃のこととして、その時期にかけて語られている「建邦神」なるものの実体を、八世紀初頭に最終的になった史書に依拠し、しかも最も新しい段階の創作によるもの多いとみられる体系神話の展開に即して、そこに建国神の原像を見出そうとする、本末転倒ともいべき態度に対する批判は今はおこう。それはさておき、しかし、現行の記紀テキスト内に「建邦神」なるものを求め、それを具体的なある神に比定しようとするとき、それがササノヲにゆきつくことは、むしろ筋のおつた自然な推理かと思える。というのは、上記のように、『日本書紀 下』の頭注は、この「建邦神」を「漠然とした創世神」かとするのだが、「建邦神」と「創世神」とでは、そもそも発想そのものに根本的なちがいがいると思えるからで、「建邦神」というからには、この大和という地上と緊密に結びついた、初源的な国家を創建したとするにふさわしい神人的な存在でなければならぬことは明白だからである。とすれば、記紀テキスト内に書かれているままに、そうした神を求めてゆけば、ササノヲにゆきつくことはまことに自然な帰趨というほかないからである。

創世神が超空間的、超時間的な存在態であるのに対し、建国神は、まさしく観念的に創案された神である場合でもあるいは、神人的な存

在が昇華して神化<sup>かみ</sup>した場合でも、あくまでも、現実的な国家的な領域の中で、歴史的時間のはるかかなたの延長上に位置づけられ、創出された、広く信仰や讃仰の対象となるような神格を有していなければならぬ。記紀テキストに照らしても、ムスヒ二神やキ・ミ陰陽神のような創世神と、建国神とでは、発想の形態そのものに決定的なちがいがあるのである。そうした意味あいから言えば、アマテラスと対偶関係におかれているスサノヲは、創世神の性格をひきずりながらも、地上系譜の筆頭に位置づけられ、妖怪を征伐して、出雲の地に隠棲し、その地で祭祀の対象となるというように、歴史的な方に大きくウェイトをおいた存在として描き出されている。記紀テキストに即して考えるかぎり、一種の「建邦神」的性格をスサノヲ像の上に認取しうるとする観想を自然だといったのは、以上のような意味あいからであるが、その傍証として、『懐風藻』の「序」にみえる、「襲山降蹕之世、檀原建邦之時……」という条で、「建邦神」を初代神武にかかわらせて語るくだりをあげることもできよう。このように「建邦神」は現実の遡行線上で、そうした歴史的時空間の中で、造型される神格にちがいないのだ。だとすれば、ことは、このスサノヲ像にとつて代わり得、この神に確実に先だつことを証しうる英雄的な建国神なるものが、記紀テキストの古層の中にはたして追認できるかどうかという問へて行きつく。その神こそが、アジスキタカヒコネであったと、改めてここでその帰結を提示しておく。

ところで、欽明期の記事中のこの「建邦神」なるものが、百済のそ

れではなく大和のそれとみなしうることについては、ほぼ検証済みの事実として話をすすめてもよいが<sup>(6)</sup>、その具体的な検証に入る前に、今一度、「建邦神」、「建国神」なるものの概念規定と、その発生の前提となるその直前の社会的諸状況について一言しておく。

中国の古典籍によってみるかぎり、「建邦」と「建国」とはほぼ同義であつて、先にあげた『懐風藻』の「序」の例からも、「建邦神」はそのまま「建国神」を指示するものとみてよい。とすれば、建国神なるものが発生してくるためには、まず何をさしおいても、国家という概念の発生を支えるにたる、それなりの王域の制覇がすでに実現されていないなければならない。さらにつけ加えれば、そうした観念の発生の前提となる、ある王や王統と緊密にきり結ばれた国家的画期が、一応の共通認識として、その王域を形成する人々の間で定着していなければならない。そして更には、こうした国家的概念や神観念という共同の幻想を支えるにたる、ある一定のレヴェルに達した相互了解可能な、共通の音声言語空間あるいは言語表現空間とも呼ぶべきものが、やはりその前提として成立していなければならない。そうした一定の国家領域の画定と、その上を覆うある一定度に達した共同の幻想空間—文化的社会的認識空間の成熟をまっして、ここにはじめて、統括的、横断的な国家レヴェルの英雄的建国神も、それを主人公とする建国神話なるものも形成されうるのだと考える。そうした限りで、建国神の発生と英雄建国神話の発生とはパラレルであつて、こうしたものの発生の前提として、国家や社会の画期的変容や決定的変革という一



大契機が、内なる現実や事実として孕まれていなければならない。

こうした史的プロセスの中で発生する英雄建国神話や英雄叙事詩は、一般現象的にいって、古代統一国家形成の一大画期に、ほぼ普遍的に派生する一種のロマンティズムをその発生源としている。いいかえれば、そうしたナショナルな心情の高揚化とその発露に立脚するロマンティズムが詩的散文的に形象化したものこそが、英雄叙事詩としての建国神話なのである。それは同時に、国家的黎明期に孕まれたナショナルなエネルギーの吸収装置として機能するものであった。

このように、建国神およびそれを主人公とする英雄建国神話の発生を支える、史的背景や社会的諸条件などについて思いをめぐらすとき、日本におけるその時代を、四・五世紀の中国の冊封体制を一つの軸に、東アジア諸国諸民族間のダイナミックな相互接触の中で、画期的な国家的変貌をとげるこの時期に重ねあわせて考えることは、自然な着想として許されるであろう。対外的なるものを契機として、やがてヤマトの連合政権内部に急成長してき、一大画期をなす、軍事的専制王権の出現に重なるこの時期は同時に、国内的には、この新しいヤマトの王権下で、ほぼ列島の全域にわたって、各地の首長層を序列化しうる、いわゆる前方後円墳体制と称される、一定の規矩を内包する墓制が確立してくる時期にちょうど重なっている。この時代がわが国における英雄時代と称される所以だが、いうならば英雄的建国神は、こうした国家的成熟のある段階で、国家的要請を背負って、その内部において創出される、文化的なるものを統合し、それを体现するシンボリック

格なのである。そうしたシンボリックな建国神の下に、統一国家将来の物語が集約され、それらが英雄一人の行動を通して語られるところに典型的な英雄建国神話が生まれるのだ。その初源的形態こそがアジスキタカヒコネ神話であり、その最も高度な成長のあとを示す物語こそが、ヤマトタケル伝説として今あるのだ。抽象的な言説に終始するようだが、建国神および英雄建国神話の生成と変容のプロセスを、現実の統一的国家形成の史的段階にからめて、あらまし以上のようなものとして位置づけておきたい。

(この項つづく)

#### 注

- (1) 吉井巖『天皇の系譜と神話 三』(一九九二年)の諸論が最も新しいもの。
- (2) 西郷信綱『古事記研究』(一九七三年)、拙稿『記・紀の詩学』(古代研究) 18号 一九八六年)、山尾幸久『古代の日朝関係』(一九八九年)、など。
- (3) アマテラス像の昇華に対応する鏡のシンボリック性の浮上と、ヤマトタケル像の悲劇王への転生にともなう剣のシンボリック性の稀薄化ともいうべき現象は、たがいに相関するものと考えられる。
- (4) 堀一郎『日本のシャーマニズム』(一九七一年)。
- (5) 和田萃『葛城古道に鴨氏の神を追う』(探訪 神々のふる里) 五一九八二年)、門脇禎二『葛城と古代国家』(一九八四年)。
- (6) 拙稿『ヤマトノヲロチ神話の原像』(古代研究) 19号 一九八七年)。